

西田哲学会会報

西田哲学会第九回年次大会報告



今年、平成二十三年（2011）年は、西田幾多郎著『善の研究』が明治四十四年（1911）年に出版されてから百周年に当たるため、七月十六日（土）、十七日（日）、十八日（月・祝日）の三日間にわたり、石川県かほく市にある西田幾多郎記念哲学館において、西田哲学会第九回年次大会と国際哲学交流シンポジウムが併せて開催された。

初日（十六日）の午前の部で

は、『善の研究』について的一般向けの入門講座が二つ併設された。一つは、米山優氏（名古屋大学）と水野友晴氏（京都大学）による、講読形式の『『善の研究』をよむ』であり、もう一つは、氣多雅子氏（京都大学）による、講義形式の『『善の研究』をかたる』である。米山氏と水野氏による講読では、『善の研究』の「第四編 第三章 神」を読みながら、適宜、文章の意味やその背景、関連する哲学的知識などの説明がなされた。氣多氏の講義は、今年、晃洋書房から出版された「哲学書概説シリーズ」の一冊であり、入門者にもわかりやすいと好評の自著『西田幾多郎『善の研究』』をもとにして行われた。講義では、『善の研究』のポイントとなる文章をふまえつつ、『善の研究』の中心となる思想について丹念に解説がなされた。

同日、午後の部では、まず『善の研究』出版百周年記念海外報



次いで、森哲郎氏（京都産業大学）による「西田幾多郎の「表現」思想」と、西田哲学会初代会長である上田閑照氏（京都大

告」として、遊佐道子氏（アメリカ・西ワシントン大学）による「アーティストにおける西田哲学と『善の研究』」という発表が行われた。遊佐氏は、文化論や芸術論についての西田のエッセーや鈴木大拙の文章等を取り上げ、アメリカの学部学生に対する講義をなめらかに再現しつつ、アメリカの学生の反応や、講義をするうえで心がけていること等について語った。

次いで、森哲郎氏（京都産業大学）による「西田幾多郎の「表現」思想」と、西田哲学会初代会長である上田閑照氏（京都大

学名誉教授）による「経験と自己覚——『善の研究』百周年に際して」という二つの講演が行われた。森氏の講演では、「善の研究」の基礎構造として、「脱自己」と「表現」（そこから）

（そこへ）と「表現」（そこから）という二重の動性の相即があることを明らかにした。「脱自己」とは、自己の奥底に還帰することであり、「表現」とは、そこから生き出ることである。同書における「宗教心」も、大きな生命の要求にほかならないゆえに、そこに「表現」が見出されることが論じられた。さらに

森氏は、『善の研究』のみではなく、後年の「場所」の論理においても「表現」が見出されることが、いくつかの禅語との対応を示しつつ解明した。

上田氏の講演では、『善の研究』に至るまで、西田が（一）徹底的に参禅したこと、（二）西洋哲学の書物を涉獵したこと、（三）家族の病気や不幸など、人生の悲哀を経験したことの三つが指摘された。そのうえで、日本において東洋と西洋の裂け目

第九号
題字 上田閑照

発行・西田哲学会事務局
〒九二九一一二六

石川県かほく市内日角一番地

電話（076）283-6600

の根底を掘ることを通じて、両者の新しい統合の可能性をはつきり自覚し哲學した哲学者こそ西田幾多郎であったことが論じられた。また、純粹経験をめぐつて、色を見、音を聞く刹那という「感覺」において、そこに一種の「明るさ」が射し、その限りない開けにおいて「目覚める」経験（自覚）について論じられた。さらに、上田氏は、西田の文章（日記や手紙、エッセー等も含む）を読むと、われわれを導き、励まし、慰みとなる言葉に出会うことがあると語った。

二日目、十七日（日）の午前部では、次の四氏の発表が行われた。順に、太田裕信氏（京都大学）による「西田幾多郎におけるハイデガー『存在と時間』」、小田桐拓志氏（アメリカ・スタンフォード大学）による「二つの自己知の概念——「論理と生命」（一九三〇）を中心にして」、水野友晴氏（京都大学）による「地下脈としての「内在的超越」——明治日本宗教哲学群像」、メリニ・コックリン氏（カナダ・マッギル大学）による「西谷のリアルな基準を問う：西田の宗教批判と対比しつつ」である。

太田氏の発表では、西田の著作『無の自覺的限界』とハイデガーの著作『存在と時間』を取り上げ、「自覚」と「了解」、「現

在」と「将来」などに注目しながら、「汝」の問題も射程に入れつつ、西田によるハイデガー批判の内実を解明し検討した。小田桐氏の発表では、ロイスやモラン等に言及しつつ、西田の前中期の概念「自覚」と、後期の概念「行為的直観」とを、二つの異質な自己知の概念として捉え返し、過渡期の論文「論理と生命」を取り上げながら、行為的直観の諸側面を究明した。

水野氏の発表では、「善の研究」における、「神と人との関係」いう宗教の規定に着目し、その内実を分析すると共に、同時代の二人の宗教学者、すなわち綱島梁川の「見神の実験」や、内村鑑三の回心との比較において、その意義を解明した。コックリン氏の発表では、西谷啓治が、「リアライゼーション」(「実現する」・「わかる」)という二義をもつ)の例として、禅の「大疑」だけではなく、净土真宗における「根源的な悪の自覚」を挙げていることに着目し、その自覚が、宗教への独自のアプローチの意義をもつことを論じた。

同日午後の部では、小坂国継氏(日本大学)の司会のもと、提題者として、片柳榮一氏(聖学院大学)、小野文生氏(京都大学)、ロルフ・エルバーフェ

ルト氏(ドイツ・ヒルデスハイム大学)の三氏を迎えて「私と汝」というテーマでシンポジウムが開かれた。

三日目、十八日(月)の午前には、「善の研究」をめぐって

というテーマで国際哲学交流セッションが開かれた。遊佐道子氏(アメリカ・西ワシントン大学)の司会のもと、提題者として、ヴァンサン・ジロー氏(フランス・ボルドー第三大学)、エンリコ・フォンガロ氏(南山大学宗教文化研究所)、アグスティン・ハシント・サバラ氏(メキシコ・ミチヨ・アカン大学)の三氏を迎えた。同日午後には、「生活と芸術」というテーマで、国際哲学交流シンポジウムが開かれた。松丸壽雄氏(独協大学)の司会のもと、提題者として、ロルフ・エルバーフェルト氏(ドイツ・ヒルデスハイム大学)、エバーハルト・オルトランツ氏(ドイツ・ヒルデスハイム大学)、美濃部仁氏(明治大学)、秋富克哉氏(京都工芸繊維大学)の四氏を迎えた。いずれのシンポジウムにおいても、熱のこもった提題と、活発な討議が繰り広げられた。昨年に引き続き、本年の大会も猛暑のなか開かれたが、暑い中、大会にお越しくださった参加者の皆様に御礼申し上げると共に、三日間にわたる大会を支えてくださった西田幾

多郎記念哲学館の方々に厚く感謝申し上げ、本年の大会報告とさせていただきたい。

(文責:熊谷征一郎)

シンポジウム報告

私と汝 小坂国継



今年度のシンポジウムは「私と汝」というテーマでおこなわれた。周知のように「私と汝」は西田哲学の中期から後期への移行期に、とくに重要な問題となつたものである。「善の研究」(一九二一年)から「一般者の自覚的体系」(一九三〇年)にいたるまで、西田の思索は、一直貫して、自己存在と自己の根源ないし本体との関係の問題に収斂しており、この意味で、西田哲学はいわば二極構造になつてゐた。いいかえれば、認識論と形而上学がもっぱらの主題であった。

しかるに、『無の自覚的限定』(一九三三年)において、絶対無の場所の形而上学的高所から世界の形而上学的高所から歴史的現実の世界に眼を転じたとき、もはやそれまでの二極構造をもつては説明できない事態が出来た。現実の世界は多・多即)である」という考えに至つた(『哲学の根本問題』続編)一九三四四年、以後)。

また、こうした過程で西田の「自覚」の概念も、それまでの「自己の内に自己を見る」こと、ないし「自己の内に自己を映す」ことから、「自己の内に他を見ること」、あるいは「他の内に自己を見る」ことへと変化して

いつたが、そうした変化を促したのは「身体」(歴史的身体)の問題であり、「汝」(人格的他の問題)である。人格的・歴史的世界における内と外との関係の問題を考える場合、身体と汝は決定的に重要な役割をはたしている。

ところで、昨年のシンポジウムのテーマが「身体」であったことは記憶にあたらしい。しかるに、今年のテーマを「私と汝」としたこととは、立案者における問題意識の連続性を示すものといえるだろう。

さて、本年度の提題者は片柳榮一(聖学院大学)、小野文生(京都大学)、ロルフ・エルバーフェルト(ヒルデスハイム大学)の三氏であった。

片柳氏は「到達点としての「私と汝」——人格をめぐる西田の思索」という題で話をされた。同氏は西田の「汝」の概念の多義性に触れたあと、私と汝の関係をめぐる種々の難問は、各自が自分自身の固有な内界を有するところから生ずるのだと考へるところから生ずるのである。私と汝の眞の関係は、絶対無という共通の根底的な場所において、相互に独立的な存在である人格的自己(私)と人格的自己(汝)がそれぞれ自己存続的でありながら、同時に他の自己存続的である存在を徹底的に依存している、いわば分離的

統一関係にあることを自覚することにあると見て、このことと西田の原典に沿って丹念に追究していき、そしてその結論と出会うというようなことはなく、ただ絶対無の自覺のノエントス的限定面(西田はそうした限定作用を「絶対無の愛」と呼ぶ)において対話し応答しあうといふことを諄々と話された。片柳氏の発表はあくまで原典に即した忠実な解釈で、きわめて深い読み込みと理解力のあとを示すものであつたと思う。

つづいて小野氏は「西田幾多郎とマルティン・ブーバーにおける媒介の論理について——時

間と言語をめぐる交叉」という題で話をされた。同氏が意図したのは、西田とブーバーの「私と汝」論を比較してその優劣を論ずることではなく、両者

一般に両者の思想に帰せられた無媒介性、直接性、神秘主義としもそうした批判が正鵠を得たものではないことを明らかにすることであった。そのため同氏は、西田の「場所的弁証法」を批判した田辺元、柄谷行人、またブーバーの「私と汝」論を批判したベンヤミン、ショーレム、クラカウアー等の所見を検討し、結局、それらの批判の矛先

は共通して西田やブーバーの「私と汝」論の直接性、無媒介性に向かっていることを指し、これに対して、「永遠の汝」や「絶対無の場所」の思想、あるいは両者の時間論、ブーバーの「現在」(Gegenwart)の概念とそこに見られる「一律背反」という矛盾を生きる」というモチーフ、西田の「永遠の今の自己限定」に見られる「絶対否定」の観念のなかに、弁証法や媒介の論理が見られることを指摘された。きわめて個性的で発想の豊かさを感じさせる発表であつた。

最後にエルバーフェルト氏は「争う・応答する・認める・殺す——私と汝のさまざまな在り方について」という題で話をされた。同氏はもっぱら分析的アプローチによって西田の「私と汝」の関係構造を明らかにしようとされた。絶対否定を媒介とした私と汝の論理的関係、「絶対の他」の意味、汝や「絶対の他」の概念の多義性などに触れた後、具体的に私と汝の関係を、「認める」「話し合う」「相争う」「応答する」「反響し合う」「相触れる」等の項目に分類して、それぞれの項目について逐一、西田が著作のなかで実際にどのように語っているかを例示しながら、そうした地道で骨の折れ

は共通して西田やブーバーの「私と汝」論の本質を明らかにしようとした。パワーポイントを用いての精力的な、またなかなかに流暢なうえにユーモアのある日本語での発表で会場を沸かせた。

三氏の発表はそれぞれに個性的かつ意欲的な内容のものであつたが、残念ながら相互に重なりあい触れあう部分が少なく、シンポジウムとしては今ひとつ議論の盛り上がりに欠けたよう思う。会場からの質問もいくぶん低调に感じられたのも、あるいはそのあたりに「因があつたのではないか。今後は、テーマの設定の際、提題者の発表内容にもう少し縛りをかける必要があるようにも思われた。

最後に大拙の D V D 『A Zen Life』(1906) は西洋人に彼の人生、思想を「とつべきやすく」している。また、大拙のエッセー、「死」は、もともと講演で話した原稿に手を入れたもののように、分かりやすくしてある。また、禅の精神が躍動している。初っ端から分別、無分別の問題がでてくるので、二元的な主客分離の考え方を一転しなければいけないわけだが、学生たちは、実際に体得できなくとも、何となく「別な考え方がある」ということだけは、分かる。これが、後に西田のエッセーを読んでいたための下準備となる。大拙の「死」を通して、「生死」の問題を、アメリカ人の日常生活から一步「離れた」観点から考えてみる。学生たちの反応は、いたつて好評で、このエッセーによつて人生について肯定的に考えさせられるとして述べている。次に、大拙から西田哲学へ移行する。学生の思考方法が、すでに、広がらざるを得ず、それが、西田哲学を理解する上で、役に立つ。

これまでの経緯、経験を述べる。
二 まず、「教科書」として使用している私編の読本を紹介する。内容は次の通りである。

part I・鈴木大拙『鈴木大拙全集』七巻『東洋的』より
part II・西田幾多郎『西田幾多郎全集』より
「死」(1941)
「讀書」(1926)
「日本的」といって
(1917)

「大震災の後に」(1933)
「書の美」(1930)
「暖炉の側から」(1931)
(とばしている)

「短歌について」(1933)
「国語の自在性」(1936)
(時間があれば読む)

「暖炉の側から」(1931)
(とばしている)

「書の美」(1930)
「暖炉の側から」(1931)
(とばしている)

「大震災の後に」(1933)
「書の美」(1930)
「暖炉の側から」(1931)
(とばしている)

「短歌について」(1933)
「国語の自在性」(1936)
(時間があれば読む)

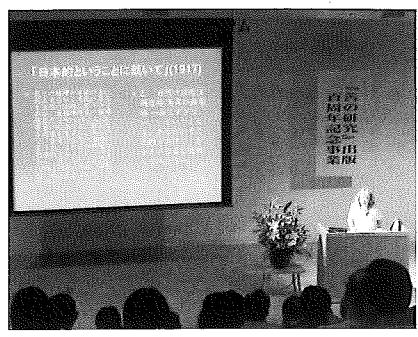
「暖炉の側から」(1931)
(とばしている)

「書の美」(1930)
「暖炉の側から」(1931)
(とばしている)

「暖炉の側から」(1931)
(とばしている)

三 なぜ、鈴木大拙から入るか
というと、アメリカの学生に、日本の思想を伝えるにも、DV D が大変有用であるからである。大拙の D V D 『A Zen Life』(1906) は西洋人に彼の人生、思想を「とつべきやすく」してある。また、大拙のエッセー、「死」は、もともと講演で話した原稿に手を入れたもののように、分かりやすくしてある。また、禅の精神が躍動している。

付録 西田幾多郎・鈴木大拙 簡易年表



遊佐先生海外報告

四 西田の「読書」(一九一六年)は、京都府立第一中学校の生徒のために書いた、いわば、父親が子供に話すような、分かりやすい読み物で、ユーモアも交えている。また、内容が、これら成長していく次の世代を担う若者の内面生活に直接関係するものである。教える側として、各エッセーに、英和語彙、簡単な穴埋め式の文章を完成させる問題、そして、内容質問の三つを用意している。身体の発育に食べ物が必要なように、精神の養成に読書が必要であるという西田のアドバイスは、アメリカの学生に新鮮にうつるらしい。

五 「日本の」ということに就いて」(一九一七年)は、四つの中章に分けて、見出しをつけ、内容がより理解しやすくなる。思想的に「整理された」日本語の文を読む練習になる。「因

果の法則と自然科学」、「価値判断の法則—芸術や、道徳といつた文化価値」のような具体的な分類の仕方から、エッセーを読んで、自分の理解をまとめていく練習をさせる。

内容質問の例であるが、「総合作用は創造的である。何とならば、自然の法則は創造的実在の抽象的一面に過ぎないからである」と西田が言っているが、皆さんのが考えた例を挙げなさい、という。私の質問に、学生の一人が、「水は零度で凍りだし百度で沸騰するが、零度から百度というのとは、人間が作り出した、抽象的概念で、それを実在に当てはめたのだ」と答えている。これを基にして、更に学生とクラス内での討議することによって、学生の西田哲学に対する「創造的かつ能動的な」読み方が出来てくる。

もう一つ、内容質問の例であるが、日本の文化が日本的であり、しかも世界文化の一要素となる、「日本文化にある一般性とは何か」、「アメリカ的文化と世界文化の関係は?」これらの問題は、「ドイツ的」「イタリア的」「インド的」と、様々と統一の違いについて説明しながら、「日本文化」の要素となる、「日本文化」の根本にあるもの、というようなことを客観的に、体系的に考えることができる。

六 「短歌について」(一九三三年)では、西田哲学の「文化論的側面について考える」行為的直観の考え方が出ているので、それがどのようなものであるかを学ぶ。西田の揮毫の紹

の二つの概念を説明するのに大変いい例である。

西田のエッセーは、一九一七年のものとは言え、「日本の

趣味を持つこと」ではない、また、日本文化にある、一般的を否定することでもない」

と述べている点に注目する。西田の結論、「我々は益々特有の文化を発展し、益々日本のとなりと共に、この文化をして世界へと、その文化を孤獨のものと考へずとも、世界の文化の一要素として尚ぶべきものである」と、思うが、実際フィールドに出てプレーする時は、そのような冷静な考へは全く頭の中からなくなってしまう。そこで、私は、「ただ盲目的にプレーするだけだ」と。そこでは、私は、「ただ盲目的にプレーするのではない。毎日の練習を重ねて、ボールが来たら、とにかくその角度で、どれだけのスピードで、それが、全部、体の知識になっているんじやないですか」と問い合わせると、「そうだ、まさしくそうだ」という答えが返ってきた。これこそ、行為的直観を言い表しているわけで、そこから、学生たちは西田哲学の概念を把握することができ

る。

八 授業では、木村素衛の「花に寄せる心」も読む。西田のエッセーばかりでは、やはり難しい

ので、学生の気分転換を狙う。木村の文体は、アメリカ人学生にとては、西田ほど難しくないようである。また、岡倉天心はベンチで試合を見ていると、カーチ選手がこう答えた。「自分はボールを蹴った方がいいなどと、思って、実際フィールドに出てプレーする時は、そのような冷静な考へは全く頭の中からなくなってしまう。そこで、私は、「ただ盲目的にプレーするだけだ」と。そこでは、私は、「ただ盲目的にプレーするのではない。毎日の練習を重ねて、ボールが来たら、とにかくその角度で、どれだけのスピードで、それが、全部、体の知識になっているんじやないですか」と問い合わせると、「そうだ、まさしくそうだ」という答えが返ってきた。これこそ、行為的直観を言い表しているわけで、そこから、学生たちは西田哲学の概念を把握することができるのである。

九 西田の「アブセンス・オブ・マインド」(一九三九年)を授業の最終段階で読ませる。ほぼ、素読できるので、学生は日本語に対する自信を得ることが出来る。内容も軽快で、読んで楽しいエッセーである。このように、自分をポンと対岸において、自分の失敗談を書くことが出来る西田という人間に、学生は好感を持つ。このようなユーモアと禅が、どのように絡み合っているのかも、面白い討議の題である。

十 コースの最後に、いよいよ『善の研究』第一編、第一章の「純粹経験」からの抜粋を紹介する。学生たちは、既に、西田の考え方方に少し慣れていますが、難しい論文を読むといった恐れが、軽減される。「純粹経験」は、前に「短歌について」で考えた「刹那をその先端からとらえる」といった考えに鑑みて、説明し

る。

七 「書の美」(一九三〇年)では、西田の哲学的観察が、如何に、芸術文化と直結したものであるかを学ぶ。西田の揮毫の紹

てゆく。哲学志向でない学生も多いので、そのような学生には、このような哲学的論文が一九〇八年の段階で書かれたということを紹介するのみにとどめる。

十一 締めくくりのコメント。

この授業では、西田哲学を「哲学」として読む前に、彼の哲学的思考の仕方を紹介する訳である。アメリカで日本思想に携わる学者でさえも、「日本人論」など、浅薄な流行思想に左右されがちであるが、日本には、確固とした思想を打ち出す基盤があり、そのような伝統が、日本人の精神性に深く根ざしているのであるということを、学生に知つてもらう。この授業を通して触れた鈴木大拙の思想や西田哲学が、日本語や日本文化を専攻している学部学生が、国際人として、また、「大人」として卒業していく上で、視野を広げ、経験を深め、学問に対して真摯な態度を養うことにつながって行ってくれることを願っている。また、西田哲学には、「純粹経験」や「行為的直観」に見られるダイナミックで身体的な「生き生きとした」側面があり、アメリカ人の若者の興味(例えば、武道など)に通じる点も多く、授業は、なかなか面白いものがある。

国際交流セッション

『善の研究』をめぐって

遊佐道子

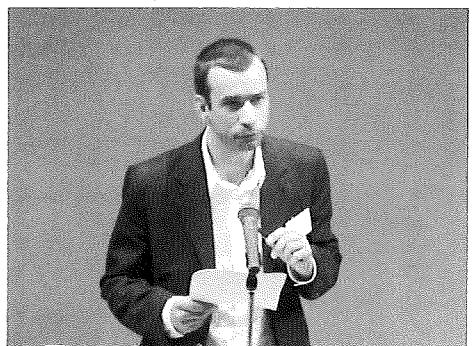
第一番目の発表者、ヴァンサン・ジロー Vincent Giraud 氏

は、フランスのボルドー大学で「聖アuggステイヌス—表出・意義」に関する博士論文を終

え、国際学術振興会の招聘によ

り、目下、京大の杉村靖彦氏の下で、「善の研究」を現象学的見地より解説している。

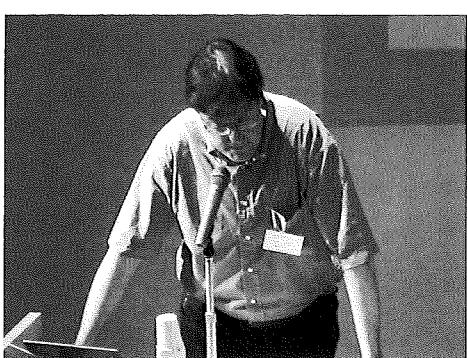
発表の題は、「意味さえも括弧に入れられるのか? 西田の純粹経験の概念をフッサール的還元の立場から見る」で、この発表の題からも窺えるが、「現象と意味」という観点から、「善の研究」に向かう。今回の発表では、「眞の純粹経験は何等の意味もない」という前提を出発点として、フッサールの現象学と対比させる。フッサールでは「意味が現存の形式的条件」であり、「現存即意味」である。こういった現象学の立場からは、西田の「純粹経験に意味はない」は、浅い観察であるとも言えるが、実は、「意識の野」の真のあり方の観察として、フッサールの現象学を更に根源的に掘り下げたものであると見ることも出来ると、ジロー氏は西田を解析する。西田では、意味は、純粹な「感情」より分析的に引き出されたもので、直接的意識に意味はなく、かつ、意味を持たない意識が意味を可能にする、



西田がジョットーが「円形を書いた」の使者に渡したとある一節をとりあげ、ジョットーに対して普通のイタリア人が持つているイメージと対比させた。ジョットーは、イタリアでは、誰もが親しみを持っている画家で、人気度という点では日本の雪舟にあたるかもしれない。ファンガロ氏は言う。ジョットーの「オー」あるいは「ト」の「オー」、あるいは「ト」の「オー」(円形)――「善の研究」の『オー』(円形)――「善の研究」イタリア語訳の受容についての考察」で、二〇〇七年にファンガロ氏自身の『善の研究』の伊訳『Uno studio sul bene』出版され、一一〇〇部以上の売

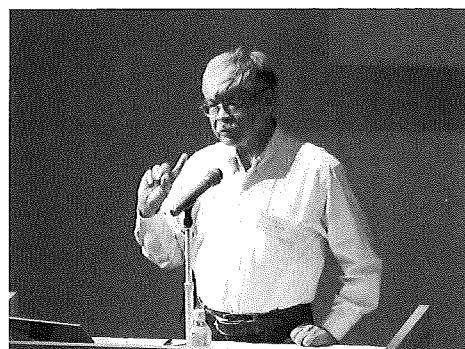
れ行きがあつたにもかかわらず、伊学者間では、西田研究

て、「現象」に対してフッサールとは違ったアプローチの可能性がひらく。意味は意味がないところから生じるという仮説は、諸現象と自己の係わり合いを理解する上で新しい指針を与える。以上が、ジロー氏の論文の要点である。



や理解が進んでいないのはなぜかを論点に話が進められた。これは、西田の思想は、一見、西洋的に見えるが、翻訳してみると、その底に日本の世界觀、経験があり、イタリア人の思想家にそれが通じにくいという事実があるらしい。その一例として、西田がジョットーが「円形を書いてベネディクト九世『善の研究』では、十一世とあるが、ヴァサーリによれば、九世である」の使者に渡したとある一節をとりあげ、ジョットーに対して普通のイタリア人が持つているイメージと対比させた。ジョットーは、イタリアでは、誰もが親しみを持っている画家で、人気度という点では日本の雪舟にあたるかもしれない。ファンガロ氏は言う。ジョットーの「オー」、あるいは「ト」の「オー」、あるいは「ト」の「オー」(円形)――「善の研究」の『オー』(円形)――「善の研究」イタリア語訳の受容についての考察」で、二〇〇七年にファンガロ氏自身の『善の研究』の伊訳『Uno studio sul bene』出版され、一一〇〇部以上の売

ンド」(円形)は、イタリア人の中世芸術専門家のセレーナ・ロマーノによれば、「幾何学的に完璧な円」であり、更に、人為的ではなく自然に出てきた、長い修行の結果身についた「技ではない技」、「sprezzatura (無為)」の表現だという。ファンガロ氏は、西田の「画家の眞の人格即ちオリジナリティは如何なる場合に現れるか。: 多年苦心の結果、技芸内に熟して意到り筆自ら隨うところに至つて始めて之を見ることができるのである。道徳上に置ける人格の發現も之と異ならぬのである」を引いて、西田もジヨットーの「スプレツアトウーラ」の概念を高く評価したのである、しかし、幾何学的側面を、西田はどちらえなかつたと結論する。また「一円形」は禅でいう「円相」とは言い切れない、それは、円相でもあり、ジヨットーでもあり、このような多文化的な重ね合い魅力もあるのかもしれない、とファンガロ氏は考える。



シント氏は、アメリカのミネソタ州の聖ジョンズ大学卒業後、メキシコ大学で、丁度メキシコを訪れていた鶴見俊介氏について、西田の『善の研究』を読み、修士論文を書く。博士課程は、上智大学で、門脇佳吉教授(神ながら日本思想研究を進めた。かつ大森曹源の弟子で、禅の老師でもある)の下に、坐禅をして、西田は主として、精力的にスペイン語に翻訳し、日本で、西田哲学を主として、精力的に西田の「善の研究」を翻訳した。西田は、西田の「善の研究」に見られない記述があることをも指摘する。西田の「論理の理解と数理の理解」(一九二一年)に見られるロイ・スの「自己代表的体系」self-representative system に言及があるところから、これらの「断章」が、『善の研究』の執筆後に亘っているものであることを指摘する。シント氏は、断章に含まれた純粹経験に関する記述からして、西田が、もし「純粹経験」の考察に更に時間を費やしたのであれば、『善の研究』に収められた純粹経験の記述を超えた、ジェームスの「純粹経験の世界」よりもっと充実した世界観を提示し得ただろうとする。しかし、西田は「既に絶対意志の世界への道を歩んでいた」と結論する。

西田哲学会の参加者および特にこのシンポジウムのために来られた方など、五十人ほどの人々が聴きに来られた。

まずはドイツ・ヒルデスハイ

ム大学哲学部のロルフ・エルバーフェルト教授が、巧みな日本語で「書と哲学」書道家としての西田幾多郎」という題で講演をされた。その概要是、西田の書に焦点を当て、西田自身が「書に至つては、(中略)筋肉感覚を通して、(中略)自由に自己の生命の躍動を表現するのである」と言つているのを手がかりにして、西田の書と思索の関係を探っていくものであつた。この関係を解明するのに、多くの思想家や書道家および西田自身の言葉を依り處にした。

の説明が必要とされているらしい。ただの翻訳ではなしに、注を加えた、annotated 翻訳がなされてもいいのかもしれない。

次に、アグスティン・ハント・ザバラ Agustín Jacinto Zavalá 氏の発表があった。ハント氏は、アメリカのミネソタ州の聖ジョンズ大学卒業後、メキシコ大学で、丁度メキシコを訪れていた鶴見俊介氏について、西田の『善の研究』を読み、修士論文を書く。博士課程は、上智大学で、門脇佳吉教授(神

哲学者、イエズス会の神父であり、かつ大森曹源の弟子で、禅の老師でもある)の下に、坐禅をして、西田は主として、精力的に西田の「善の研究」を翻訳した。西田の「善の研究」に見られない記述があることをも指摘する。西田の「論理の理解と数理の理解」(一九二一年)に見られるロイ・スの「自己代表的体系」self-representative system に言及があるところから、これらの「断章」が、『善の研究』の執筆後に亘っているものであることを指摘する。シント氏は、断章に含まれた純粹経験に関する記述からして、西田が、もし「純粹経験」の考察に更に時間を費やしたのであれば、『善の研究』に収められた純粹経験の記述を超えた、ジェームスの「純粹経験の世界」よりもっと充実した世界観を提示し得ただろうとする。しかし、西田は「既に絶対意志の世界への道を歩んでいた」と結論する。

西田哲学会の参加者および特にこのシンポジウムのために来られた方など、五十人ほどの人々が聴きに来られた。

まずはドイツ・ヒルデスハイム大学哲学部のロルフ・エルバーフェルト教授が、巧みな日本語で「書と哲学」書道家としての西田幾多郎」という題で講演をされた。その概要是、西田の書に焦点を当て、西田自身が「書に至つては、(中略)筋肉感覚を通して、(中略)自由に自己の生命の躍動を表現するのである」と言つているのを手がかりにして、西田の書と思索の関係を探していくものであつた。この関係を解明するのに、多くの思想家や書道家および西田自身の言葉を依り處にした。



郎の書き方は、書きながら構想も発展させる。書きながら考えに進んで、書き終わってみなければどんな風になるかが予想できぬといふような創作法だったのではないか。これは思索しながら書く、書きながら思索する（以下略）」という考え方には、エルバーフェルト氏は同感したと思える。氏はここからさらに敷衍し、下村寅太郎の「先生の書道は先生の思索と同一の性格を持つている」という主張に基づき、西田の書道から思索と書道との根源的関係を証示した。かくして、エルバーフェルト氏は、次のように結論づける。思索と同一の性格を持つ書道とは「意味を身体化する、身体を意味化する」という交互作用の結果である。

続いて、ヒルデスハイム大学のKunstを基にした「芸術」の意味も持つている。Kunstは、日本語では「芸術、美術」がふさわしいことも多いが、複数形で使っている場合には、「芸術、美術」に加えて、「技、技術、術、すべ、技芸」、あるいは「芸道」の意味も前面に出てくることをオルトランド氏は意図している。

その共通理解を基にするところでもあったが、以下のように要約できる。

生きるために、我々はいつも生きるために、我々はいつもKünsteを必要としている、即ち技術や、医術や、話術や、解釈術や、芸術に依存している。如何に生きるかが問題になる時、そもそも人間の生をそれ自体として、また生を全体として概念化すれば、Kunstとして把握できる。人間に成るという

哲学部のエバー・ハーデ・オルトランド教授は「生き方としての諸芸術」と題してドイツ語で講演をされた。この講演を理解するには、前提として、次のようにことが共通理解となつていなければならない。それは、ここで「諸芸術」と訳されたドイツ語であるが、Kunstという言葉の複数形Künsteである。このKunstはもちろん「芸術、特に美術」の意味があるが、同時に「技、技術、術、すべ、技芸」人工」という意味も持つていてある。Kunstは、日本語では「芸術、美術」がふさわしいことも多いが、複数形で使っている場合には、「芸術、美術」に加えて、「技、技術、術、すべ、技芸」、あるいは「芸道」の意味も前面に出てくることをオルトランド氏は意図している。

生きるために、我々はいつも生きるために、我々はいつもKünsteを必要としている、即ち技術や、医術や、話術や、解釈術や、芸術に依存している。如何に生きるかが問題になる時、そもそも人間の生をそれ自体として、また生を全体として概念化すれば、Kunstとして把握できる。人間に成るという

ことがKunstなのである。人間に成るということは、それ自身に成るという当たり前とも思える面もありながら、しかも同時に、自己自身を超えているものに成るということでもあります。しかしどんな場合でも、私が自己の生の道を歩むことは、私の行為のKunstを通して作られた私のもの(mein Kunstwerk 私の作品)を産出することは例外なく結果する。このようにして、私の生の道を歩むことで挑んでくるものを理解するのに重要な役割を果たす「諸芸術Künste」の実践に基づく経験を反省することは、今まで哲学の周辺領域に押しやられていたが、中心的な問題となって然るべきである、と主張する。更に、オルトランド氏は、生の道を歩むのに、重要な意味を持つKünsteの有り方を、映像制作などを取り上げて説明する。自立的な自己責任をもつて代替のきかない個人の生を送ることを言いつけてくるものの新たな理解と生きる術(Lebenskunst)という古い概念を新たに理解することが展開されたのが西欧の近現代であるが、これに対しても、我々は自分自身を、作品を作るKünste概念から解き放ち、もつて即興的なモデルに定位して考

ることが、茶道における『心』』と題して、生の根源としての心は、茶道においてどのように考えられているか、と問い合わせられる「無心」であると答える。無心であるとは、無限に広い視野において、一切をありのままに見ることである。この無心は、茶道における、美を以下のよう無心であることなしには茶の美を真に経験できないという仕方で、相補的かつ動的な自己同一性を茶の美と無心とが形成している。ところで、ありのままに見るということは、どういうことか。例えば、茶碗を例に取れば、一つの茶碗は一切のものとの関係の中に有つて始めて一つの茶碗の相補的動的自己同一を形成する。言い換えれば、一切のものを自己に集めるような仕事の茶碗のありのままの有り方である。このありのままの有り方に一つの個物として有る。それが、

最も、それに関わって美を経験する人の生も含んで茶碗の美であるという意味で、生の根源の深さを自覚にもたらす芸術として茶道があることを明らかめるものである。

最後に、京都工芸織維大学の秋富克哉教授が、「ハイデッガーの東アジア的芸術との対話から」という講演をされた。これは、久松真一とハイデッガーとが参加したコロキウムの記録を基にしたものである。そこでの対話は、ヨーロッパ的芸術と東アジア的芸術とを対比的に性格づけている。そもそも、「芸術」は、ArtなりKunstの翻訳語であるが、これに対比できる東アジア的「芸術」は、日本語の「芸道」がそれに当たるであろう。しかも、芸道としての芸術は、久松も強調しているように、根源的な生に直接関わっている。東アジア的芸術の代表として、久松は差し当つて禅芸術をあげる。この禅芸術においては、芸能くじうる」と das Könnenに二つの道があるとする。現実から現実の根源への道と根源から現実への還帰というものである。これは往相と還相とを意味する。これは往相と還相とを意味する。現実から現実への道と根源から現実への還帰というものである。これは往相と還相とを意味する。現実から現実への道と根源から現実への還帰に見られるとする。従つて、禅芸術は、ハイデッガー的な表現を使うなら、「禅の真

理が自らを作品の内へ置き入れること」として、根源の働きに他ならない。他方でヨーロッパ的芸術は、ハイデッガーによれば「形作られたもの」、従って「見えるようすること」を中心とする。このような形あるものの表現としての芸術は、禅における根源への道においては妨げになる。しかし、ハイデッガーの立場に沿って言うなら、それは単に障害ではなく、根源に向かう自己の働きに機縁を与えるものともなり得るのではないか。この点において、ハイデッガーの芸術論・作品論は東アジア的芸術と共通の地盤を持ちうると言える。

さて、以上の四つの提題に対して、司会者は、書道、芸道、茶道などの観点から、Kunstと「道」との関係が共通項となると捉えて、しばらく四提題者にこのことについて議論をしてもらい、その後フロアから意見を頂戴した。この「道」に関する提題者間の議論とフロアから意見や議論を十分に深めるには、時間は少なすぎた感みがあり、司会者は判然とした纏めをすることはできなかつた。しかし、生と芸術ないしは芸道との関わりを探求できた良いシンポジウムであったと考える。

会場は、ヒルデスハイム市の郊外にある田園豊かな地で、中世から伝わる古い石造りの廻舎とその付属施設を状態保存しながら内部を現代の使用に適うように改築しつつあるところで開かれた。この建物が修復・改築した暁にはヒルデスハイム大学のメディア学部、芸術学部、演劇学部、そして哲学部なども移転することになっていると聞いた

『善の研究』刊行百周年記念国際会議について

松 丸 壽 雄

た。古い建築物を保存する、所謂「レノヴィールング」作業は専門性を伴う特別な技術が必要とされる。時間をかけて中世の石壁の修復補強が慎重になされているのを見学した。改築が済んだ一部の歴史的建造物は思考を集中させる効果があるのであろうか、また田園の雰囲気もそれを補助する様に作用したのであろうか、五日の間、我々はかなり集中的に議論を交わすことができた。

国際会議という名前に相応しく、ドイツ、アメリカ、スペイン、イタリア、スイス、ベルギーそして日本から多くの西田哲学研究者が集い、さらにドイツ国内の哲学研究者や学生も多く参加し、総勢五十名を超える日もあつた。

初日は、エルバーフェルト教授が日本語で、有坂陽子博士がドイツ語で、開会の言葉を高らかに宣言したのにまず驚かされた。これに続いて、在ハンブルク日本領事館総領事の小坂節雄氏のユーモア溢れる祝辞から始まり、ヒルデスハイム大学のトニー・トーレン副学長による



内容も、西田哲學固有の問題領域からの興味をかき立てられる研究発表も多くあつたが、西田哲學と他の分野の哲学や思想との比較的見地からの研究発表と議論、その内一つだけ例を挙げれば、経済学との比較的研究もあつた。さらには武道や舞踊などの芸術への関連から述べられる発表と盛んな議論もあつた。そして、自然科学、特に量子力学に関する物理学研究の立場から「場所」を「動力学的場」見なす解釈に立つものや、認知科学との連関からされた「行為的直観」に関する研究など、目を惹く研究発表は枚挙にいとまがない。そして、それらに統く議論もなかなか活発で、興味深いものであつた。もちろん、刊行百周年に因んだ『善の研究』を中心に据えた、示唆に富んだ研究発表は多く見られた。しかし、残念に思う点もある。それは、西田哲学を最初から型にはめ、そこから最初から予想しておいた型どおりの結論しか引き出さない研究発表もあつたことである。

しかしながら、総数で三十二の発表がなされ、質的にも一定のレベルを超えるものであつたと判断できる。関係者何人かの人々がインタビューを受け、今学会の意義などについて質問され、それが編集されてDeutschlandfunkというラジオで放送され、また、

域からの、興味をかき立てられる研究発表も多くあつたが、西田哲學と他の分野の哲学や思想との比較的見地からの研究発表と議論、その内一つだけ例を挙げれば、経済学との比較的研究もあつた。さらには武道や舞踊などの芸術への関連から述べられる発表と盛んな議論もあつた。そして、自然科学、特に量子力学に関する物理学研究の立場から「場所」を「動力学的場」見なす解釈に立つものや、認知科学との連関からされた「行為的直観」に関する研究など、目を惹く研究発表は枚挙にいとまがない。そして、それらに統く議論もなかなか活発で、興味深いものであつた。もちろん、刊行百周年に因んだ『善の研究』を中心に据えた、示唆に富んだ研究発表は多く見られた。しかし、残念に思う点もある。それは、西田哲学を最初から型にはめ、そこから最初から予想しておいた型どおりの結論しか引き出さない研究発表もあつたことである。

ORFというインターネット上のニュースにも紹介された。それぞのインターネットサイトで見たり聞いたりできるとのことである。今までに日本の一人の学者に関する研究発表が中心となつておらず、しかもそれが海外でこれ程までに大々的に取り上げられたことがあつたであろう。国際的な舞台で、中心主題として取り上げられる日本の哲学者はけつして多くはない。日本文化の歴史の中で位置づけられて、何人かの思想家が取り上げられたことはあつたであろうが、今回のように西田幾多郎一人をテーマにした国際会議は今までにあつたとは思えない。それが、ヨーロッパのドイツという国で、西田哲学が各国の研究者によって議論されるといふ、まさに画期的な出来事が今回の国際会議なのであった。

九月九日に国際西田会議は幕を開じた。大成功であったと企画したエルバーフェルト教授、有坂陽子博士と共に私たち参加者も一緒に感じ取れた。参加者の一部は、これが終ると同時に、「ハイデッガーと西田」という会議に出席すべくメスキルヒ市に赴いた。

今後の方針に関して一言いえ

ば、日本の哲学、さらには東アジアの哲学が世界に広まつて、いくことが期待される。しかし、まだ広がるばかりではなく、第一段階として、東アジアの哲学とヨーロッパそしてアメリカの哲学との対話がなされる場が恒常に作り上げられて行くこと必要であると考える。次の段階は、中東などの地域をも含んだ、所謂「アジア」全体の哲学・思想との対話の場を整え、更是にアフリカやオセアニアの哲学・思想との対話というように、輪を順次広げて行くことによって、世界哲学・思想というものの可能性を追求する方向もあり得るであろう。だがそれと同時に、世界哲学・思想「の中における」日本の哲学という独自性を維持しながら世界に開かれている哲学の可能性をも追求する必要がある。これは同時に、各文化圏の哲学が世界に開かれるようになることを意味する。言葉を換えていえば、追求する形で開くべきものは、相互の理解を通して普遍的な理解可能性の場に開かれていると同時に、各文化圏の独自性の自覚

なることである。対話とは、相手を理解することにより相互承認に到達することが可能となり、同時に自己を理解することを通しての自己承認を達成することが可能となる場所を、切り開かれつつ切り開くことである。それは自と他との相互作用の場所が現成することであり、これが国際的対話の目指すべきひとつの方針であろう。

このような国際的対話を通じて、我々哲学に携わるものは、単なる個別研究に終らずに、将来の世界像を、将来の人間の歩むべき方向を、或いは予測的に、或いは批判的に、示すことも大切のことと考へる。

エッセイ

哲学館で働いて

山名田沙智子

石川県西田幾多郎記念哲学館が平成十四年に開館してから、九年が経つた。開館から働いている私には、もう九年も経ったのか、というのが率直な感想だ。旧西田記念館の資料や事業を引き継ぐ形でリニューアルオープンし、さらに、哲学の普及、という大きな目的を掲げた。九年間、果たして多くの人の思いや期待にどれだけ応えてくれたのかという疑問は、常に

つきまとった。目の前に聳え立つて、それを理解することにより相互承認に到達することが可能となり、同時に自己を理解することを通しての自己承認を達成することが可能となる場所を、切り開かれつつ切り開くことである。それは自と他との相互作用の場所が現成することであり、これが国際的対話の目指すべきひとつの方針であろう。

このような国際的対話を通じて、我々哲学に携わるものは、単なる個別研究に終らずに、将来の世界像を、将来の人間の歩むべき方向を、或いは予測的に、或いは批判的に、示すことも大切のことと考へる。

その中で平成十六年から続けてきたのが、連続講演会と映画上映会を組み合わせた特別企画だ。毎年一つのテーマを設定し、その分野の専門家を招き、話を聞く。一方からだけの考え方を聞くのではなく、時には対照的な意見を持つ人も同時に招き、一つの催しとして組み立てる。多角的にものを見て、それまでの自分の考えも疑つてみる。哲学を学ぶことに関心がない、哲学を学ぶことに興味がないと実感する瞬間だった。

哲学館の外に広がる「哲学の杜」も、九年が経ち杜らしくなってきた。植栽された木々たちが杜へと成長してきた時間に、哲学館は人々にとってどのような存在となつたのだろうか。開館の日、大橋良介名誉館長はこう言っていた。「五年十年経つとだんだん歴史が作られていく。その歴史環境がずっと続いていくと「伝統」というものが生まれ、形成されてくる」。ここ西田の故郷で生まれ育ち、西田の母校宇ノ氣小学校で独特な教育を受け、成長して西田哲学館で働く私もまた、この町の「伝統」の中で形成された人間の人なのかもしれない。この場所に流れる現在・過去・未来を感じながら、開館十周年がはじまる。

理事会報告

年次大会初日を開催される恒例の理事会が、七月十六日（土）、西田幾多郎記念哲学館で行われた。出席理事十三名、委任状提出による欠席理事六名、幹事四名で、議長は松丸会長が務められた。

一、第十回年次大会について

七月の第三土曜日とその翌日の日曜日という原則に従って、平成二十四年七月二十一日（土）と二十二日（日）に開催することが確認された。開催地は順番通りに京都とし、場所の候補として京都産業大学、京都工芸織維大学が挙げられた。最終決定は、秋の理事会（十一月六日、明治大学）で行う。

二、報告事項

（一）事務局

大熊氏より二〇一〇年度会計報告と二〇一一年度予算案が提出され、承認された。

（二）編集委員会

浅見編集委員長から、年報第八号の講演録に欧文要旨を掲載しなかつたことが報告された。また、今年度大会は国際シンポジウムと共同開催のため来年度年報に論文投稿が多くなることが予想されるが、編集方針に関しては編集委員会に一任されることが承認された。内容については、例年通り、講演とシンポジウムは依頼論文、個人発表と外国語セッションに関しては投稿の上査読という手続きの確認がなされた。

三、その他（事務局関連事項）

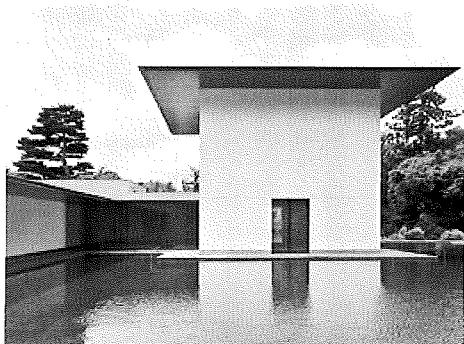
（一）入会手続き等について
規約第四条「会員となるには、理事会の承認を必要とする」に基づき、新会員の入会は理事会の承認によることが確認された。そのうえで、平成二十二年度の入会希望者五名、二十三

年度の入会希望者七名が承認された。入会時期に関して、大会前年十一月の理事会以降に、翌七月の大会での発表のために入会を希望する者についての申込書類を預かって七月の大会初日の理事会で承認。入会することを前提として発表を認めることもあることと、発表申込と入会申込とを同時に申請するという形も認められることが、確認された。

・会員の種別（A、B、C）の変更についても理事会の承認を必要とすることが確認された。

・入会に際して、既存のB・C会員一名の推薦を必要とするとは、すでに議決済だが、これを徹底することが確認された。

（二）海外会員の振込み方法について
・海外会員がクレジットカードで会費を振込むことができるよう、クレジットカード会社に加盟する手続きに着手することが提案され、承認された。
(文責 秋富克哉)



西田哲学研究会の「」案内

・西田哲学研究会「於京都」
・ほぼ四十年の歳月をかけて最後の宗教論まで破綻した西田哲学研究会の新規第二弾です。従来と同じく三ヶ月に一回のペースで、現在「善の研究」を読み進めています。参加は自由、連絡先は左記です。

幹事・秋富克哉 (akiromi@kitac.ac.jp)
案内は、基本的にメールで行ないますので、参加ご希望の方はこのアドレスへご連絡下さい。

西田哲学研究会「於東京」
毎月一回、読書会を開催しています。原則として第四土曜日の午後三時から六時までですが、都合で日程が変更になることがありますので、関心のある方は左記の事務局までご連絡ください。

鈴木大拙館開館のお知らせ

鈴木大拙館は、金沢が生んだ仏教哲学者 鈴木大拙の考え方や足跡を広く国内外の人々に伝えることにより、大拙についての理解を深めるとともに、来館者自らが思索する場として利用することを目的に二〇一一年十月十八日開館いたしました。

開館時間 午前九時三〇分～午後五時
休館日 毎週月曜日
住所 〒922-0109六四
石川県金沢市本多町
電話 ○七六一-二二一八〇一
FAX ○七六一-二二一八〇一二
メール daisetz@city.kanazawaishi.kawaj.jp

今年度も、引き続き交付基金を公募します。一件につき三〇万円から五〇万円で、数件の採択を予定しています。下記の要領で応募下さい。審査結果は、『会報』で報告します。

（i）提出書類
①履歴書
②研究計画（八百字程度）
（ii）提出先
〒六〇六一八五〇一 京都市左京区吉田本町、京都大学文学研究科、氣多雅子研究室
（iii）締め切り
二〇一二年四月二十八日（土）必着
（iv）備考
二年内に、研究計画報告書を提出していただくことになつていて

「年次大会」における口頭発表の応募について

第十四回年次大会（平成二十四年七月開催）の口頭発表者を公募します。応募者は三月末までに、八〇〇字程度の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局へお申し込み下さい。

編集後記

本会報には第九回年次大会の諸報告に加えて、かほく市・メスキルヒ主催「国際交流シンポジウム」とヒルデスハイムで開催された「善の研究」刊行記念百周年国際會議」の報告等を掲載しました。また、エッセーを石川県西田幾多郎記念哲学館の山名田沙智子さんより寄稿していただきました。そのため、紙幅が増し一層充実した内容になるとともに、西田哲学へ

の関心が国内外で高まっていることが実感できる会報となりました。ご協力いただいた皆さまに心から感謝いたします。

十月十八日に金沢市に「鈴木大拙館」が開館しました。これによって西田哲学への関心がさらに広がるのではないかと期待されます。この小さな会報も西田哲学への関心を高め、広める機会となるようにとの願いを込めて編みました。ご一読下さい。

（編集委員長 浅見洋）

す。報告形態は、刊行物のコピー、抜き刷り、あるいは四千字程度の報告文書とし、提出先は上記の氣多研究室とします。西田哲学研究基金運営委員会二〇一一年度代表 板橋勇仁

い。次回の開催日時、開催場所、テキストをお知らせいたします。また、当研究会では毎年、研究会誌「場所」を発行しています。

〒一六七一〇〇五
東京都杉並区
西田哲学研究会事務局
nishidaphi@mx9.ttcn.ne.jp

二〇一〇年度、第五回の西田哲学研究基金公募には一名の応募があり、厳正な審査の結果、以下の研究に四〇万円を交付しました。

小田桐拓志氏「一人称という問題相」。

「西田哲学年報」掲載論文の公募について

「年報」巻末の応募要領したがつてご投稿ください。たくさんの応募をお待ちしております。なお次号第九号掲載分は二〇一二年一月末をもって締め切りとさせていただきます。なお「年報」巻末の応募要領をご参照下さい。